

現代倫理道德研究会（平成 31 年 2 月 6 日）発表要旨

『道德科学の論文』に底流する「永続」という価値  
ニーチェによる“ダーウィニズム”批判からの再考

生命環境研究室  
研究助手 古川範和

廣池千九郎は、「日本皇室の万世一系の研究」より端緒を開いた彼の道德科学で重視される「子孫の永久的繁栄」が、東洋に固有の価値であることを認め、釈迦や孔子など東洋の聖人の行動が漸進的且つ円満であるのに対し、ソクラテスやイエスなどのそれが急進的且つ壮烈であると指摘している。これを例証するかのように、廣池と、彼同様に近代化（モダニズム）を批判したフリードリッヒ・ニーチェとの間には、東洋的漸進性と西洋的急進性の間の隔たりがやはり存在するが、前者の聖人思想と後者の超人思想の比較は、今後必要になるであろう東西南北に通じる普遍的な道德科学の構成について、多大な示唆をもたらすと考えられる。現段階で指摘できるのは、自己の絶対的な自信として現れる「明朗清新」に、道德的生の価値が集約され得ることである。